

市民科学研究室会員有志から寄せられた

2015 私のおすすめ3作品

締め切り 2016年2月29日、到着順に掲載到

杉野実

● チップ・ウォルター『人類進化700万年の物語』（青土社）

現生人類は例外なくホモ・サピエンスというひとつの種に属していますが、700万年の人類史のなかでは数十のことなる種が出現しては消えていきました。そのなかには、数万年前の旧石器時代というかなり最近まで現生人類と併存してきた、ネアンデルタール人（ホモ・ネアンデルターレンシス）のようなものまでいたというのに、結局ホモ・サピエンスだけが生き残ったのは一体なぜでしょうか。このなぞにいどむ著者は、現生人類が他種の化石人類にくらべて身体的にきゃしゃであるという事実を見つけ、「ホモ・サピエンスは一種の『幼態成熟』をしたのではないか」との仮説を提示します。現生人類は成長しても、身体だけでなく頭脳も子供のまま、だからこそ精神に柔軟性があるって文明もきずけた、というわけです。魅力的な説ではありますが、化石からそこまでいうのは飛躍のしすぎでしょう。「人間の本质にせまる」ものをふくみ、心情的には支持したい仮説ですが、立証のためには、たとえば現生サル類の身体と行動の比較研究などが必要な気がします。

● 小川和也『儒学殺人事件』（講談社）

江戸城内で暗殺されるという奇異な死に方をした堀田正俊のことは、同じく暗殺された大老である幕末の井伊直弼にくらべると、不思議なほど知られていません。その正俊がつかえた将軍は、異様な「犬公方」として語られると同時に、学問に熱心なことでも知られ、近年「再評価」のむきも少なくない徳川綱吉でした。こんなふたりのとりあわせに、また事件自体があまり知られていないという事実そのものに、著者としてもおおいに感じるころがあったのでしょうか。儒教の解釈をめぐるふたりのあいだに長く確執があり、遂には将軍が人を使って大老を殺させた、との大胆な仮説を著者は提示するのです。ことの性質上、正史に証拠が残りにくいのはわかりますが、それにしても本書であげられている議論のほとんどが、「正俊の理想とした君主像から、綱吉がいかに遠かったか」という問題にむけられている点には、方法論上の不満が残ります。思想史としてすぐれた本であるだけに、「殺人事件」というまとめ方をすべきでなかったと思われてなりません。

次は「社会科学」ですが、角度をかえて、「政治的問題に科学はどうかかわるべきか」ちょっと考えてみましょう。

● 蔵治光一郎・保屋野初子編『緑のダムの科学』（築地書館）

無論本書でも、「森林（や水田）は（コンクリート）ダムのかわりになるか」という問題が重視されていますが、それに対して「なる」とか「ならない」とか（あえて）明確に断言していない点に、よくも悪くも本書の特徴というか、もっといえば存在意義があると思われれます。技術に關与する農学・工学系の研究者と、政策や住民運動に關与する法学・経済学系の研究者が、共同で執筆していることは目次をみればあきらかです。しかし内容を読み進めてみれば、「森はダムのかわりにはならない、両方とも必要だ」と定量的な議論をもとに力説する前者と、「森を保全してダムのかわりにする、政治的な意思を示すことが重要だ」と主張する後者とのあいだに、容易にうめられない齟齬があることにおどろかされます。一冊の本のなかに齟齬があると批判されることを承知で、こういうかたちで出版したことは、むしろ英断とたたえられるべきでしょう。科学研究と政策発信を結びつける有能な「緑の党」みたいなのが日本にもほしいと、こういう本を読むと思います。

吉岡寛二

今年は、「歴史関係」と「芸術関係」と「宗教関係」が一つずつです。

● 原田伊織著「明治維新という過ち」～日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト～（2015/1/15, 毎日ワNZ）

最近近代史に興味があって、本屋に行くときすぐに手が出てしまいます。二年ほど前から、「韓国慰安婦問題」と「南京事件」を調べていたのですが、どちらも「明らかな冤罪」であると思うようになりました。どちらも朝日が強力に推し進めたこともあって、韓国・中国という国家との政治問題になっているのですが、一昨年秋になって朝日新聞は慰安婦問題だけは誤りを認めました。いまさら過去のことを言っても仕方がないし、今後どうするかということを考える必要がありますので、現代史・近代史に興味を持っているわけです。

明治維新については以前から、「いろいろとわからんことがあるなあ？」と思っていたのですが、この本を読んでかなりの部分について納得することができました。吉田松陰とか坂本竜馬は「本当に偉人だったの?」とか、「会津藩が明治政府に対する逆臣になった経緯は?」とか、「尊皇攘夷っておかしいよね?」とか、「何で維新後も戦争が続いたの?」とか、疑問があったのです。

著者は、京都伏見生まれであり、また高校までを彦根で過ごされたことも大きいのか、明治維新に対しては（逆の意味で）強い思い入れがあるようです。書き過ぎではないかと思う面はありますが、殆どが真実だろうと想像しますので、一読をおすすめします。戦後、米国の都合で「自虐史観」が日本に刷り込まれてしまったのと同様に、薩長の都合で「明治維新が日本を救った」という神話が刷り込まれているのかもしれませんが。

● 太陽の森ディマシオ美術館（北海道新冠町，2010年8月オープン）

山の中にある美術館で車でしかアクセスできないので、一日に何人の旅行者が訪れるのでしょうか。日高地方の山奥にある旧廃校を改築したのですが、深い雪のため平成27年12月1日～平成28年4月14日は休館です。昔から美術館とか博物館とか大好きなのですが、ヘタの横好きというやつで美術的知識・センスは全くありません。でも、2015年6月に見たディマシオの幻想画は衝撃的でした。今までに、これほどの衝撃を受けた画家はいません。

翌日のことですが、十勝地方の中札内美術村（の一つである北の大地美術館）でも衝撃を受けました。「20歳の自画像」というテーマで、十数名の作品が展示されていたのですが、これほどまでに内面が表れるものかと感心・・・のではなく作者の心の奥にある深い悲しみに驚愕したのです。女性が7～8割だったのですが、みんな自分を実際以上に醜く描いていたのでしょうか。こちらは、企画展と思われまので、今も展示しているかどうかはわかりません。

● 森本あんり著「反知性主義」－アメリカが生んだ「熱病」の正体－（2015/2/20, 新潮選書）

「反知性主義」という言葉が、2014年頃から流行語になったのかいくつかの本が出版されました。内田樹氏の「日本の反知性主義」（2015/3/30, 晶文社）では10人の方が執筆されているのですが、全員が語源とは関係なく自己流で解釈されており、「非科学的・非合理的」に近い意味で捉えられているようです。森本あんり氏は宗教学者／プロテスタントで、「反知性主義」の歴史を非常にわかりやすく説明されています。

森本あんり氏は、私が大好きな（昨年紹介しましたが）小田嶋隆氏との同級生だったそうで、その意味でも興味を引きました。お二人の対談を読むと、仏教の「生臭坊主」という言葉に相当する、「チョーいい加減な牧師」というのをイメージしました。内容はマジメすぎる本です。

石坂信之

● 武田康男「雲のすべてがわかる本」(成美堂出版) 2014年6月

著者武田康男さんは「雲についての本」を何冊も出しています。大判の「ずかん雲」(技術評論社、2015年)では10雲形のそれぞれの形になるワケを図解していて秀逸です。そしてこの本では、“天気図と雲の形を関係づけて紹介しています”が、そういう本はなかなかないので。

分類上、国際的にも10雲形しかない雲ですが、プロの気象観測員でさえも見上げた雲の名前を決めるのに悩むことがあると聞いています。私はかつて(小学5年生から中学2年生まで)ほぼ毎日、気象観測をしましたが、短時間で雲形を特定することに時には大いに悩みました(今でもですが……)。

雲を見ていることが楽しいと言ったら、忙しい世の中から相手にされないかもしれません。しかし雲は見上げればそこにあり、消えたり広がったり他の雲に化けたり、おまけに昔の雲であっても国外でも変わることがありません。

「うらうらに照れる春日にひばり上がり 心悲しもひとりし思えば(大友家持)」とか「おうい雲よ いういと 馬鹿にのんきさうぢやないか どこまでゆくんだ……(山村暮鳥)」の中の空の様子は想像がつかます。風景が変わっても、ひばりの声が聞かれない環境になっても、空の様子や雲は時代を超えて今も思い浮かべることができます。

著者の雲の写真は日常に現れる雲であってもとても美しいので見ているだけで楽しくなります。この本を底本として現在の天気図を見ながら、心静かなに今出ている雲とこれからの雲の変化を想像します。後々には雲の変化を見て天気図を思い浮かべられるようになりたいと思っています。こういう雲オタクがお薦めする本です。

● 飯塚玲児「温泉失格 超改訂版」(徳間書店) 2015年11月

題名は何らかの受けを狙っているようで、手に取るのをためらうかもしれません。温泉についての本は数多くあり、中には書いた方の知識や見識を疑うものが多いと思います。この20数年、温泉の類書にうんざりしてきました。とはいえ、何年か前まで温泉に関わってきた私だからといって、知識や見識のレフリーができていのかどうかは断言できませんが、まず、それをお断りしておきます。

この本の著者は「旅行読売」の編集者を経て同誌の編集長になり、2500湯以上の温泉に入ってきたといいます。しかし、編集長の時は温泉について「何も見ていなかった。何も知らなかった。」と「はじめに」に書いています。その著者が、この本では温泉の実情をよく理解した上で温泉はどうあって欲しいか、ということについて書いています。

科学的事項の理解がやや不明のところ(酸化還元電位など)もありますが、そういう不確かなことについては取材者の発言を通じてカバーしようとしている点は、類書にない

ころです。温泉には何か問題点があると感じている方や温泉をもっと知りたいという方に、この本はお薦めします。

● 泊次郎「日本の地震予知研究 130 年史」(東京大学出版会) 2015 年 5 月

まもなく東日本大震災から 5 年になります。震災前、各地の地震発生確率が公表され、最も切迫性があるとされたのは地震発生確率が 99% (今後 30 年以内。2005 年 1 月想定) の宮城県沖地震 M7.5 (三陸沖地震と同時発生する場合 M8.0 前後) でした。しかし、実際に起きた東北地方太平洋沖地震 (震災名は東日本大震災) は M9.0 (正式には MW9.0) という巨大地震でした。

当時、兵庫県南部地震以降の地震観測データをもとにした地震解析が飛躍的に発展し、中でも地震の際に大きく“ずれ動いて”強い地震波を放出する領域 (=アスペリティ) の科学的な理解が進んでいました。まず 2003 年の十勝沖地震ではアスペリティが繰り返し同じ地震を引き起こしていることが明らかになり、次いで過去の三陸沖地震の震源域を複数のアスペリティに区分して数値シミュレーションしてみると、過去の三陸沖地震の震源や規模をよく再現できたのです。

ところが東北地方太平洋沖地震 (震災名は東日本大震災) が起きた後、今まで知られていた三陸沖から茨城県沖までの領域でアスペリティが全て連動して地震が起きたとして計算しても M8.2 程度であり、実際におきた地震規模の M9.0 には達しないことがわかったのです。東北地方太平洋沖地震は、近代に起きた地震域より、もっとスケールが大きい領域の東北太平洋沖にある海溝付近の断層が 50m も“ずれ”て動いた地震だったのです。

もう一つの誤謬は、気象庁が出した津波警報のもとになる予測方法が役に立たなかったのです。当初、予想された津波の高さは 3-6m であって、住民によっては 10m の防潮堤があるからだいじょうぶと避難しなかった事例も判明しています。最初から巨大津波の警告があれば被害はもっと少なかったはずです。この件についてはここでは詳述しませんが、こういったことから東日本大震災では多くの地震研究者が敗北感を抱きました。

この本の著者はこういったことは東日本大震災に限らなかつたといいます。過去 130 年、こうした科学 (=予知研究) と地震災害のイタチごっこは繰り返されてきたとしています。この原因は地震研究が「体制化した科学」となっていることにあると指摘しています。では今後、地震科学はどうあるべきか? それは、従来の体制化した国家プロジェクトから地震予知研究を分離し、純粋な科学の論理として進めるべきであり、国家プロジェクトのような機関参加型ではなく研究者が個人で自由に参加でき、もっと競い合うことが必要だとしています。

この本は 671 ページに及ぶ分厚い本なので、それだけで手に取ることさえためらいます。しかし地球物理学を専攻し、新聞の編集者であった著者だからこそ書ける的確な内容と平易な文によって、とても読みやすくなっています。東日本大震災から 5 年たった今、かつて地震分野に僅かに立ち入り、普及冊子を作成した私も自己の反省と自分の立ち位置の確

認のため、この本と真剣勝負をするつもりで読みました。「こういう見方もあるのか」と思いを新たにするとところもあり、自分の認識を鋭い刃物で切られた気がしました。東日本大震災の地震科学について検証するには最も平易でお薦めの本でしょう。

橋本正明（自称：市民科学者）

● 吉村葉子「フランス流お金をかけずに豊かに暮らす方法」中経の文庫 2013

以前にも書いたが、私はちよくちよく本に呼び寄せられたり、呼び掛けられたりと面白い出逢いをする。今回もそうだった。

週末によく妻と出かけるショッピングモールの大型書店で妻の買い物を待つ間にふらりと立ち寄った新刊のコーナーで、ふと誰かに呼ばれたような気がして視線を何故か下げると【彼女】はそこに居た。不自然に私の方に向いて…。

そして手に取ってみようと手を伸ばして気が付いた。「あれ？この本は本来ここにある本じゃないぞ？」廻りには全く違うサイズの新刊が山積みされていて、見渡しても同じ本は全く見当たらない。不思議に思いながら中のページを捲ってみる。

「う～ん、平凡な本かなあ…。ん？」

「これ新刊じゃないぞ！」

本来の書架を探すと20メートル以上離れたところが本来の【彼女】の居場所だった。ちょっと悩んだが、こういう時は大抵後になって後悔をするものだ。これはたまにある【一期一会】だと考えて買って読んでみた。

何だろう？平凡なフランス流の生活スタイルの紹介に過ぎないはずなのに何故かとても素敵な感じだ。何だかとってもふんわりと私を優しく包み込んでくれるこの雰囲気は読んでいだけで私を幸福な気持ちにしてくれる。これはエスプリなのだろうか？

結局、何故あそこに【彼女】が居たのかは分からず仕舞いだったが、そんなことはもうどうでもいい。素敵な【彼女】に巡り逢えた。いや、さりげなくアプローチされた。それでいいじゃないか。

● 映画 「天空の蜂」

東野圭吾が20年も前に入念な取材の基に書き上げた作品の映像化したものである。この映画は単なる反原発の映画ではないということをご覧になればよく分かると思うが、それだけでは無い。

この映画には一般の市民の意識を大きく変えるチカラがあるのだ。面白いというよりも、場面の各所に散りばめられているメッセージに幾つ気づき、そしてとにかく考えさせられることは間違いが無い。

そんな映画である。

この映画の全篇を通して感じるのはガラス越しに眺めている感覚と癒えることの無い深い哀しみである。そして刹那的でありながらも細部にまで緻密に計算し尽くされた滅びの美学とでも言える様な終着点へのランディング。これ以上はこれから観る方々の楽しみを奪いかねないので敢えて控えさせて頂くがしかし、これ程の内容のものが世に出て一顧だにされないということは通常有り得無いだろう。作者も感じたように何らかの大きな意志によって意図的に無視され抹殺されたとしか思えないのである。

それにこの舞台は夏休みの8月上旬の設定なのだが、公開は9月上旬。通常ならこのような大作は夏休みの子供連れの家族が観る様な時期に照準を合わせるものであるが、それをわざと外したとでもいうのだろうか。丁度夏休み終わりの映画興業でいえば閑散期の時期に上映しなければならなかったのは何故かと勘繰りたくもなる。製作者は舞台設定と同じ夏休みに上映することを意図していたはずだからである。

またもや大きなチカラがまた働いたとでもいうのであろうか。ゲスな勘繰りもしたくなってしまうものである。

● アニメ「天元突破 グレンラガン」とフレドリック・ブラウン「天の光はすべて星」(新装版)

2007年の本放送時には日曜の朝という事もあり、まともに全部は観れていなかったが、偶然中古DVDショップで見付けてしまい方々を梯子した挙句、3ヶ月掛かりで全10巻買い揃えてイッキ見してみた。

やっぱりサイコーに面白かった。

たかがアニメと馬鹿にすること勿れ、この作品は第11回(2007年)文化庁メディア芸術祭のアニメーション部門優秀賞を受賞している文部省ご推薦の由緒正しい(?)アニメなのである。

ちなみにこの作品は単なるロボットアニメではなくて、主人公のとにかく臆病で「ヘタレ」の少年が成長しながら自分の唯一無二のチカラを開放し、全地球ならぬ全宇宙を滅亡から救うというストーリー。

本放送から8年を経た今尚根強い人気があり、昨年末から今年にかけての年末年始にもニコニコ動画で全話放送の特集が組まれた程である。

昔のSFを彷彿させるハチャメチャなギャグが盛り込まれた主人公たちの掛け合いやストーリーの後半随所にちりばめられている疑似科学的な多次元宇宙論はさておき、最終回のタイトルである「天の光はすべて星」など、往年のSFファンも思わず「!？」となってしまうような仕掛けが仕込まれているのである。

それだけではない。「無理を通して道理を蹴っ飛ばすんだよっ!」とか「いいか、忘れんな。おまえを信じろ。おれが信じるおまえでもない。おまえが信じる俺でもない。おまえが信じる、おまえを信じろ!」という主人公を導くアニキや主人公が放つ「俺たちが掴もうとしている明日は、てめえが決める明日じゃねえ!俺たちが、俺たち自身が無限の宇宙

から選び出した！俺たちの明日だ！」などといったフレーズの数々に年甲斐も無くシビレてしまったのである。

あっ！市民科学者は道理を蹴っ飛ばしちゃいけないんだっ…

でもまあ、アニメだからいいか…（笑）。

この作品はきっと迷える青少年たちに特にお勧めなのである。

そして私はアニメを先に観てから読まれることを…。いや、どちらでも好きな方でよいのであるが…

権上かおる

今年は、地方の3つの文学館といたします。お近くに行かれることがあれば、ぜひお寄りください。

● 公益財団ブルボン吉田記念財団ドナルド・キーン・センター柏崎

なぜ「文学館」と思ったのは、ここへ行ったためです。2013年に開館したことは、報道などで知ってはいました。幸い昨秋、柏崎に用事があり、絶好のチャンスとばかりに行きました。日曜日の開館と同時に入館すると、同財団吉田眞理理事（お菓子のブルボンの社長夫人です）にご案内いただく事ができました。

多くの方の善意と中越地震、東日本大震災などの災害も含めた様々な偶然が重なり、ロンビア大学のキーン書斎・居間をほぼそのまま移築できたのだそう。展示に映像なども多く、キーン先生の交流の広さ、長さが展示の豊富さにつながっていることに間違いありません。「ここに見えた方は、皆私（キーン氏）のお客様」とソファーや椅子に座らせていただいて、多数の方の思いやりで実現した館の感動的なお話を伺うことができました。企業の社会貢献についても深く考えさせていただきました。

<http://www.donaldkeenecenter.jp/>

● 群馬県立土屋文明記念文学館

1990年に逝去された文明先生は、青山の私の職場の近くにお住まいでした。ご自宅は、それほど広くはないのですが、草木がうっそうとした異空間でした。今は片鱗もないのが残念です。先生の車いす姿も何回かお見かけもし、ご長女の小市草子様と親交もありました。文明先生は、群馬県の寒村から、伊藤左千夫が経営する錦糸町駅近くの牧場に高等小学校を卒業すると牧童として上京したそうです。当時の牧場は、いまで言う先端産業なんだそう。優秀なので、左千夫が上の学校への進学を勧め、資金を出してくれる人も探し、東大を大変苦勞をして卒業したとのこと。

1996年にこの館ができたと聞き、足を運びました。戦争中の疎開の苦勞や、戦前にハン

セン病療養所に奥様が同行して歌の指導に行ったこと。など、伺ったお話や読んだものが立体で浮かんでくるような思いをしました。

tsuchiyakan@pref.gunma.lg.jp

● 公益財団法人 斎藤茂吉記念館

ここは、何回も足を運んでいます。その一番の理由は、その名の通り斎藤茂吉記念館前駅からすぐなこと。また、館のピロティーからの雄大な蔵王連邦の眺めもすばらしいものです。

茂吉先生も青山の方でしたので、町にも通った文具店などの面影が残っています。

1968年開館という文学館としては、老舗でしょうか。北杜夫などご一族の展示品もあり、画を描かれる方も多いようで、文字だけの文学館でないところも特徴かもしれません。

<http://www.mokichi.or.jp/>

瀬川嘉之

● スチュワート・L ユードル著、紅葉誠一訳

『八月の神話—原子力と冷戦がアメリカにもたらした悲劇』時事通信社、1995年

8月5日、原子力規制委員会は再稼働に向けて、川内原発の30年超老朽化に伴う保安規定変更を駆け込みで認可しようとしていました。建物前で抗議していたときに、会った人からすすめられた本です。本をすすめられた経験はめったにないのですが、読んで知らなかったことばかりなのに驚きました。この内容はもっと検証が必要です。NHKスペシャル『新・映像の世紀』を見ても、BS世界のドキュメンタリー『ウォルト・ディズニー』を見ても、デュポン財団御曹司によるレスリング五輪金メダリスト射殺事件を題材にした映画『フォックスキャッチャー』を見ても、アメリカの病いが伝わってきます。その支配下にある日本こそ深刻なのですから。

● 写真家、嶋村 大志

中国チチハルで日本軍が遺棄して埋めた毒ガスの入ったドラム缶が2003年建設現場で掘り出され多くの被害者を出した事件の写真8月17日に蒲田の大田区産業プラザで行われた「戦後70年 明日への想い～日中友好写真・パネル展 毒ガス・細菌兵器の被害者たちの明日を見つめて」というイベントに行き、写真を見て嶋村さんのお話を聞きました。特に印象に残ったのはチラシにもなった若い女性の横顔です。彼女は日本で行われた裁判でも証言しました。しかし、その後被害者であることを一生隠し通す決心をしたそうです。知られても差別されるだけでいいことはないとわかっていたからです。今は子どももできてそれなりに暮らしているそうです。日本における多くの戦争や公害の被害者と同じだと思

いました。日本も中国も差別社会なのだなど。

● 最相葉月『ナグネー中国朝鮮族の友と日本』岩波新書、2015年

10月22日、市民科学講座Bコースで最相さんのお話を聞くにあたり、たまたま読みました。人生は出会い、出会いこそ人生。

上田昌文

今年はなぜだか「私のおすすめ 3作品」の原稿を寄せてくれる方はとても少なかった。私の悪い癖で、「3作品」といいながらいくつも挙げてみたり、長々と書いていたりすることが、会員の皆さんに「こんなにいっぱい書かなくてはいけないのか？」と怖じけてしまっているのだろうか？ それとも単にめんどろなのだろうか？ ぜひ次回（来年）は短くてもかまわないので、寄稿していただければと願っている。

● 情報技術の歴史をとらえるために／『インフォメーション—情報技術の人類史』（ジェイムズ・グリック・著 楡井浩一・訳 新潮社 2013年）など

「情報」をめぐる諸概念の形成や関連学問分野への拡張や影響、そして社会状況の変遷をパノラマとして描いた大作（英語辞書やウィキペディアのことにも触れている）。練達の科学ライターにして初めてなし得る仕事だと思う。ないものねだりだが、伝記的な記述でもっと突っ込んでほしいと思える部分が多々ある。そこであわせて『チューリング 情報時代のパイオニア』（B・ジャック・コーブランド・著 服部桂・訳 NTT出版 2013年）、『情報時代の見えないヒーロー ノーバート・ウィーナー伝』（フロー・コンウェイ&ジム・シーゲルマン・著 松浦俊輔・訳 日経BP社 2008年）、『フォン・ノイマンとウィーナー』（スティーブ・J・ハイムズ・著 高井信勝・監訳 工学社 1985年）を読んだ。チューリングについては映画『イミテーション・ゲーム/エニグマと天才数学者の秘密』（ベネディクト・カンバーバッチ主演）の原作となったアンドルー・ホッジス・著『エニグマ アラン・チューリング伝』（上、下）も最近出たが、そちらは未読。翻訳があまりよくないらしいので、躊躇している。ウィーナーは一般向けの書物の書き手としても一流で、面白い本が何冊もある（『人間機械論』、『神童から俗人へ』、『サイバネティックスはいかにして生まれたか』、『科学と神』、『発明』ですべて、みすず書房）。ただしすべて絶版。今から半世紀も前に前に書かれた「科学と社会」に関する本でこんなに面白いものはなかなかないので……なぜなんだろう？

- 武満徹の生涯と作品を回顧する／『ア・ストリング・アラウンド・オータム 他』
(演奏: 横山勝也, サイトウ・キネン・オーケストラ, 今井信子, 宮田まゆみ, 鶴田錦史
指揮: 小澤征爾 ユニバーサル ミュージック クラシック 2000年)

日本人作曲家で海外でも飛び抜けて有名なこの作曲家が亡くなって20年。彼の業績や人となりを回顧する多くの放送番組が組まれた。私が聴いたのは、ミュージック・バードの4回の特集「武満徹」という生き方～没後20年武満音楽祭(1回6時間の番組で、ゲスト・解説担当はそれぞれ、片山杜秀、菊池成孔+高見一樹、小室等+武満真樹、池辺晋一郎)やNHKFMの「クラシックの迷宮」(案内役: 片山杜秀)での武満の映画音楽特集、同じく「現代の音楽」(案内役: 西村朗)の武満特集。改めてこの作曲家の足跡が戦後50年間の日本の歩みとどう同期していたのかを考えさせられた。オーケストレーションとしてみたとき、武満の後期の作品群は、ドビュッシーやメシアンのさらに先を行く極度の職人芸で、官能的で変化自在に夢まぼろしの世界を、あるいは、風や川の流れのせせらぎや陽の光のゆらめきのような、リズムがあってないような自然そのものの呼吸の佇まいを、楽音だけで出現させている。上記CDに収められた曲は、そうした武満の世界の一端をよく味あわせてくれる選曲だと思う。例として、youtubeで聞くことができる標記の曲「ア・ストリング・アラウンド・オータム」を掲げておきます。(私は自分にとって「音楽がわかった!」と言えるのは、その曲が全部身体に入ってきて、初めから終わりまで「次はこの音が出てくる……」と“指揮の真似事”ができる状態になることだと感じているので、武満の曲では2015年この曲がそうしたものの仲間入りをしたという意味で、思い出があるのです。)

https://www.youtube.com/watch?v=fZ_GhLOhwa0

- 痛烈な社会批評から／『本当の戦争の話をしよう 世界の対立を仕切る』(伊勢崎 賢治・著 朝日出版社 2015年) 及び『ファーマゲドン 安い肉の本当のコスト』(フィリップ・リンベリー&イザベル・オークショット・著 野中香方子・訳 日経BP社 2015年)

安全保障や平和を論じる際に、観念的・心情的な「思い」だけでは尽くせないはずなのにそれに固執してしまう、あるいはまた、理念的なものを一蹴するかのようにな戦略論的な話だけに終止してしまう……といった傾向がよくあるように思うが、前者『本当の戦争の話をしよう』は、一筋縄ではいかない現代の戦争・紛争の現場での経験をふまえて、日本による真の国際貢献とは何かを問っている。高校生たちへの講義と議論の記録で、非常に読みやすい。後者の『ファーマゲドン』は、言及されている個別の事実はずでに知っているものもあったが、ここまで徹底した取材で世界各地の状況が取りまとめられると、圧倒される。“畜産”という名を借りた、資本主義の行き着く所の一つの“地獄”が、環境破壊の観点も含み込んで克明に描かれている。

文学関係の付記：

ある作家や批評家の著作をまとめて読む（古本屋やネットで拾い集めて……）、というのは一番楽しい読書の形だと思いますが、2015 年にそうした出会いがあったのは、栗津則雄の 10 冊ばかりの音楽エッセイと、中村光夫の数冊の評論集などでした。前者は音楽への愛着がじわりとこちらに伝わってくるような筆致が素敵でした。後者は、たまたま手にした『志賀直哉論』がきっかけです。私は太宰治の「如是我聞」ほどまでに罵倒する気持ちはありませんが、この作家が「小説の神様」などと持ち上げられているのがどうしても納得できなかったのです。この本を読んで、私が抱いていた印象を精緻かつ周到に論証してもらったような感じを受けて驚きました。戦後 70 年を振り返る意味でも、この批評家の思想的エッセイは読み応えがあると思います（『日本の近代』など）。

また有名なサマセット・モームの『世界の十大小説』のような評論的ガイドブックを読むのも楽しいですが、「この続編を書くとしたら……」という気持ちで、これに類した本を漁って覗いてみるのも一興です。2015 年は、渡辺京二・著『娘への読書案内—世界文学 23 篇』（朝日文庫）という本と塚崎幹夫・著『名作の読解法—世界名作中編小説二〇選』（原書房）という良い本に巡りあいましたが、これらも絶版のようで、残念です。

食関係での付記：

私が一番頼りにして活用している料理本、魚柄仁之助・著『ひと月 9000 円の快適食生活』が 2015 年に文庫本になりました。ここにはいろいろ科学的に検証してみたくなるネタも詰まっています。また今年買った調理器具で重宝しているのが、[「Flamen くるくる野菜スライサー」](#)というもので、これのおかげで野菜を調理する時間が短縮でき、蒸し野菜などにして手軽に大目に野菜を摂れるようになりました。